

モンリオールのユダヤ系とケベックワ¹⁾

——歴史的経緯と伝語表現ユダヤ系作家 N. カタンらの作品にそいながら——

真 田 桂 子

はじめに

真にコスモポリタンな共存とはどのようなものであるのだろうか。あるいはそうした関係を築くためにはどのようなことが求められるのであろうか。モンリオールにおけるユダヤ系とケベックワとの関係は、このテーマを考える上で一つの興味深いモデルを提供してくれると思われる。

ケベックでは、仏系住民を中心とするナショナリズムが今も無視できない勢いを持っている。しかしその一方で、近年著しい多民族化が伸展し、カナダ政府が標榜する多文化主義とは異なった、独自の民族共存のあり方とコスモポリタニズムが模索されていることは注目に値する。とりわけ人口の半数を擁し、英仏系の二極をもつモンリオールにおいて、ケベックのマジョリティでありながら歴史的に抑圧されてきた立場にあったフランス系住民とあとからやって来た各々の移民たちとは、ケベック社会の独自性を背景に、単なる支配者と被支配者、あるいは規範となるマジョリティと同化を求められるマイノリティという関係にはとどまり得ない独自の関係を切り結んできた。なかでも、19世紀末からモンリオールにやってきたユダヤ系移民²⁾は、ケベック社会の発展に寄与し少なからぬ影響を及ぼしてきたと言えよう。ケベックの社会学者 G. ブシャールも指摘しているように³⁾、ケベック社会においてユダヤ系が果たしてきた役割の重要性と特殊性を鑑みると、ユダヤ系とケベックワとのこれまでの歩みを検証することは、ケベックに兆す新しいコスモポリタニズムを考えていく上で、一つの大きな試金石となりうると思われる。

このような前提にたちながら、この小論ではまず、ケベック社会に根づいていったユダヤ系移民の歴史的な経緯を、おもにモンリオールという都市の発展への貢献とケベックワとのかかわりを中心に振り返る。一方、移民作家の文学には、しばしばそうした両者の関係が色濃く反映されてきた。従って次に、モンリオールのユダヤ系文学に目を投じ、概観したユダヤ系移民の歴史的変遷と社会的な状況を下敷きに新たな読解を試みる。とりわけここでは、伝語表現によって活発な創作活動を繰り広げてきたユダヤ系作家のナウム・カタンの作品に注目し、複雑に入り組んだ人間関係の機微に分け入り、ケベックにおいて模索されている新しいコスモポリタニズムの可能性について考察したい。

I モンリオールのユダヤ系—歴史的な視点から—

1. サン・ローラン通りの独自性とユダヤ系

ケベックへの移民の大部分は、モンリオールに集中して住んでいる。そのモンリオールの移民の歴史において、象徴的な意味を担い、重要な役割を果たしてきた場所としてサン・ローラン通り⁴⁾が挙げられる。

大河であるサン・ローラン河に浮かぶ川中島に発祥したモンリオールを南から北へと横断するこの通りは、この都市の歴史そのものを考える上でも極めて重要な意味をもち、独自の発展を遂げてきた。モンリオールの発祥は、17世紀にカナダに入植しこの地をヌーベル・フランスと宣言したフランス人

が、北米へと進出するための拠点として拓くことになった城塞都市であった。当初は城塞がめぐらされ河口に拓けた小さな街にすぎなかったが、毛皮貿易を主とする商業の発展とともに、街は城塞の外へと次第に拡大していくことを余儀なくされる。こうして、街の城塞を抜けて南から北へと延びていく通りがサン・ローラン通りの始まりであった。すなわち、サン・ローラン通りは、モンリオールが城塞都市を脱却し、文字通り近代化へと踏み出すための道程となった。その後サン・ローラン通りは、まさに産業化を牽引する都市の大動脈として発展をとげ、モンリオールの近代化の拠点としての役割を果たしていく。

それに加え、文化的な意味においても、サン・ローラン通りは象徴的な意味を担ってきた。モンリオールでは、少数者でありながら支配者層として影響力を及ぼしてきたイギリス系と多数派でありながら被支配者層として社会の下層部にとどまってきたフランス系とは歴史的に住み分けをおこなってきた。サン・ローラン通りはまさにこの英系と仏系の境界線をなし、おもに通りの西側に英語系の居住地が広がり、通りの東側には仏語系の居住地が発展していった。すなわちサン・ローラン通りは、英仏の二極をもつモンリオールの分水嶺として機能してきたのである。そしてこの通りに、世界の各地からやって来た移民たちが住みついてコミュニティを形成していく。現在も河口の港から始まるサン・ローラン通りを北へと上っていくと、中国の街角を彷彿とさせるような中華人街、ポーランド系やハンガリー系などいくつもの東欧系の食料品店、ユダヤ人居住区の名残を感じさせるシナゴグ、イタリア語専門の書店や銀行、カフェなどが軒をつらねるイタリア人街が広がっている。そこを抜けると広大な敷地に各国の食材を集めた店が一堂に会し、食文化の博覧会のようなジャン・タロン市場にたどり着く。このように、サン・ローラン通りには、中国系、イタリア系、東欧系、ユダヤ系など様々な移民の居住地が筒状の通りに連なって存在し、ゆるやかに結びつきながら多様な民族の共存と交流を実現したコスモポリタンな空間となっていく。

象徴的なことに、このサン・ローラン通りは現在にいたるまで、フランス語で La Main（主流となる大通り）と呼ばれてきた。例えばパリにおいて、移民の大部分がパリ郊外に住んでいるように、大都市



サン・ローラン通りの食料品店。看板には Main と書かれている。

において移民たちは周辺部に追いやられるのが常であった。しかしモンリオールでは、繊維産業を中心とする産業化の拠点となったサン・ローラン通りには多くの移民たちが入り込み、移民たちがもたらす多様な文化的な息吹とともに、この街の大動脈として活力を生み出していった。

一方、サン・ローラン通りは、多様な民族が行き交い多様な夢想と現実が交錯する場としてしばしば作家の想像力をかき立ててきた。

……この街の東と西を分かť伝説的な境界線であるサン・ローラン通りはまた、多くの民族が会う文化の坩堝である。通りには、ハンガリー系ユダヤ人、ポーランド人、ロシア人……等々の仕立屋や食料品店が立ち並ぶ。アイルランド人の魚屋の隣で、お客の真ん前で鳥の羽をむしっているポルトガル人の肉屋のまわりには何やらもの珍しい雰囲気が漂っている。ここでは、絶えず何かしら新しい文化的な空間が生み出され、ありきたりの景色を塗り替えてくれる。La Main では、夢想と現実が入り混じり、なにげない日常とハッとするような新鮮な驚きが交錯する。誰かが言うように、サン・ローラン通りを歩けば、どこかを旅しているような感覚に襲われるのである。⁵⁾

そして、このサン・ローラン通りにすみついた移民たちのなかでも、とりわけユダヤ系移民はこの通りの発展に最も重要な役割を果たしてきた。

2. 横断者としてのユダヤ系と組織力

19世紀末から20世紀初頭にかけて、旧世界での産業化にともなう人口余剰によって押し出され、あるいは祖国での政治的・宗教的迫害を逃れた人々は、急速にすすむ工業化と産業化の波に対応するため多数の労働人口を必要とした新世界へと押し寄せる。こうして、アメリカ大陸の港には多くの移民が上陸する。モンリオールにも、第一次世界大戦前までにヨーロッパから多くの移民がやって来る。とくに目立ったのはイタリア系とユダヤ系であった。ユダヤ系の多くは、中央ヨーロッパやロシアのポログラ



ユダヤ系の墓石置場

ム(ユダヤ人迫害)を逃れた人々であった。モンリオールのユダヤ系は、1911年には、30,000人程度であったが、1930年には60,000人まで増加した。その後1980年代に100,000人余りに達し、現在までほぼ横ばいの状態である。数の上では1960年前後にイタリア系に優位を譲るまで、モンリオールにやって来た移民の中ではもっとも多く、フランス系、イギリス系に次ぐ重きをなしていた。

その当時モンリオールにやって来たユダヤ系のほとんどは、イディッシュ語を母語としアシュケナジムというグループに属していた。イデッシュヨホン(イデッシュ語を話すユダヤ系の人々)は口語的な文化を基盤とし、プロレタリアートで社会主義的な傾向が強かった⁶⁾。彼らの多くは小売業や繊維産業に従事した。サン・ローラン通りをのぼっていくと、小売店の合間に現在は寂れてしまったいくつもの大きなビルディングが目につく。それらの多くは20世紀中庸にかけてさかえた繊維工場の跡である。サン・ローラン通りを中心に興隆した繊維産業は、文字通りモンリオールの近代化を牽引する産業として発展をとげた。ユダヤ系の人々は、労働者としてのみならず経営者としても大きな手腕を発揮して、繊維・服飾産業を中心とする産業の発展に大きく貢献した。

ユダヤ系が迫害を逃れ流浪のなかを生き延びてきた理由の一つは、組織力にたけ、移住したいかなる場所でもネットワークを作ることができた点が考えられる。モンリオールのユダヤ系は、とりわけ強いプロレタリアの意識と社会主義的な傾向を持ち、組合活動(サンディカリズム)にも熱心に取り組んだ。注目すべきことは、こうしたユダヤ系の組織力は、ケベックのフランス系に大きな影響を及ぼした点である。1960年代におきた「静かな革命」にいたるまで、ケベックのフランス系は多数派でありながら、少数派であったイギリス系に支配され社会の下位層にとどまっていた。また当時のケベックワの多くは農村の出身者で、工業労働や都市生活への適応にすぐれているとは言えなかった。サン・ローラン通りの繊維工場の労働者のなかには、多数のケベックワにまじってユダヤ系移民もいた。そして組合を組織しストライキを率いたのは、多くの場合ユダヤ系であった。

5月のメーデーでの決起集会について話し合うために、それぞれの組合を代表するメンバーが集まった。ユダヤ系と多くのカトリック(ケベックワ)のグループもいた。話し合いの結果、ついにストライキを行うことが決定した。……5月1日は、1,800人ももの労働者が集結し記念すべき日となった。大行進はシャン・ド・マルスまで続き、広場では、構成員が属すすべてのグループの言語で熱狂的な演説が繰り返された。⁷⁾

このようにユダヤ系は、社会の近代化に不可欠であるサンディカリズムと組織力のスキルをケベックワに伝授していったのである。さらに注目すべきことは、こうしたユダヤ系の社会主義的な勢力は、フランス系の自由主義的勢力と結んで、ケベックの民主化を阻んでいた30年代から50年代にかけての保守反動的なデュプレシス政権に強く対抗し、ケベックワの解放と民主化の推進に大きく貢献したのであった。

その他にもユダヤ系のコミュニティでは、病院、学校、出版社をはじめ様々な公共施設の建設がすすんでいく。もともと組織力をもちコミュニティの整備をしていく原動力に恵まれていたユダヤ系であったが、モンリオールの特異な状況はそれをさらに加速させた。すなわち、モンリオールの社会には、英語系プロテスタントと仏語系カトリックの二つの主流派が存在し、それらのコミュニティはすでに各々の学校や病院などの公共施設を持っていた。後述するように反ユダヤ主義の影響もあり、ユダヤ系は当初、そのどちらからも受け入れられなかった。従って、ユダヤ系は独自の組織や公共施設を整備していく必要に迫られたのである。そしてそのことにはある意味で、ユダヤ系が同化されずに独自の文化的な活力を保持し続けていくことに役だったのであった。

ユダヤ系の作った公共施設のなかには、コミュニティの垣根を超えて、他の移民やケベックワに共有された施設もあった。例えば、サン・ローラン通りにある「シューベールの浴場」と呼ばれる公共浴場は、貧しい人々に良質で安価な公衆衛生を提供するため1932年にユダヤ人のジョゼフ・シューベールに



ユダヤ系のシナゴーグ

よって作られたが、ユダヤ人に限らずあらゆる労働者階級の人々に開かれていた。ルーマニアから移住したシューベールは、熱心な社会主義者としてモンリオールにおけるサンディカリズムを積極的に率いて、労働者の権利の擁護と拡張のために闘った。彼はまた市会議員として、女性の参政権や老齢年金、母子家庭への手当の実現のために奔走した。

このようにユダヤ系は、その組織力と都市生活者としてのスキルによって大きな影響を及ぼし、抑圧された主流派であったフランス系とはある意味で補完的な関係にあった。そして、その当時のモンリオールの発展に深く関与していったと言えるであろう。

3. ユダヤ系とケベックワ——補完的な関係と果たされなかった出会い——

ユダヤ系とケベックワの歴史的な歩みを検証していくとき、両者は錯綜した関係のなかで、つねに共感と反発という相反する感情のはざまを揺れ動いてきたと言えよう。

まずユダヤ系とケベックワは、ある意味で相似的な存在であったと言える。ユダヤ性を支えに世界中に離散したディアスポラの民として、あるいはフランス系というアメリカ大陸のただ中の圧倒的なマイノリティとして、両者は互いに生き残りをかけ、強い宗教的なこだわりを持ち続けた。ユダヤ教とカトリックという違いこそあれ、両者はそれぞれに選民思想と復活を信じるメシア思想を信じていた。さらに移住してきた当初は、ユダヤ系の大部分は貧しい中央ヨーロッパからやってきたプロレタリアであり、ケベックにおけるマジョリティでありながら社会的に抑圧された立場にあったケベックワとは、経済的には似通った境遇にあった。

一方で、すでに指摘したように、1960年代の「静かな革命」を経るまで、その多くが農村出身であったケベックワと、長い歴史を通して世界のいたるところで都市生活者であったユダヤ系とは、そうした側面においては対照的であった。同じ移民でもイタリア系移民の多くは南部の農村出身であり、その面ではフランス系と似通っていた。また、ユダヤ系は秀でた組織力によってコミュニティを整備し、一気に駆け上がって経済的な成功を収めていった。社会的な上昇を果たしたユダヤ系の多くは英語を話して

アングロフォンとなり、少数派でありながら支配者階級にあったイギリス系に互してケベック社会の経済的な中枢に入り込んでいく。ユダヤ系の一族が興した会社のなかからは、Steinberg や Bronfman といったケベックを代表する企業も生まれていった。このように、早くから社会的に成功し急速な変貌を遂げていったユダヤ系に対して、ケベックワの方は、「静かな革命」を経て経済的なエリートが台頭する1960年代にいたるまで長く下位層にとどまることを余儀なくされ、両者の補完的な関係がうち立てられた蜜月は次第に忘れ去られていった。一気に経済的な成功を取め、英系とのビジネスパートナーとなつていったユダヤ系は、ケベックワにとって、同志というよりはむしろ警戒心を引き起こす存在となつていく。

経済的な階級においてイギリス系に近づいたとはいえ、世界中にはびこっていた反ユダヤ主義の勢いはケベックでも押しとどめようがなかった。今日のケベックでは多民族化が進み、イスラム系を始めキリスト教以外の様々な宗教を信じる人々が共存している。しかし20世紀の中葉まで、ユダヤ系はケベック社会に入り込んだ初めての異教徒の民であり、その存在はカトリックの牙城であったこの地に少なからぬ波紋を呼んだ。とりわけカトリックの僧侶たちによって牛耳られていた公立学校ではユダヤ系をなかなか受け入れようとはしなかった。ユダヤ系はこのように、カトリックであるフランス系からも、プロテスタントであるイギリス系からも排除される憂き目にあっていた。ケベックの大学におけるユダヤ人差別はこの傾向を如実に示すものである。例えば、現在はユダヤ系の学長が就任しているマッギル大学において、ユダヤ系がすんなりと入学を許可されるようになったのは第二次世界大戦後のことにすぎなかった⁸⁾。

一方、言語の面に注目すれば、すでに述べたようにモンリオールにやって来たユダヤ系の大部分はイディッシュ語を話していたが、現在ではほとんど引き継いではいない。その後モンリオールのユダヤ系の多くはアングロフォンに属していったが、他の移民と比べ、ユダヤ系は英語も仏語も話すバイリンガルである確率が極めて高かった。1960年代以降カナダの移民法が改正され、有色系の移民が多数流入するようになり、モンリオールには北アフリカ出身のユダヤ系でセファルデジムといわれる仏語を話す人々が多数移住した。その中にはフランコフォンにとどまるものもいたが、その多くは英語も話し英仏両文化圏で活動した。このようにユダヤ系は、英語系と仏語系の両文化圏にまたがるすぐれた横断者であった。しかしこうした両義性によって、ユダヤ系は複雑さと曖昧さをともしなう分かりにくい存在としてむしろ孤立していく。ケベック社会の発展に大きく貢献しながらも、ユダヤ系は次第に曖昧さに満ちた、警戒心を引き起こす存在として遠ざけられ、ユダヤ系とケベックワは互いに無知と無関心のなかに落ち込んでいった。

ユダヤ人排斥やラシストの動きにもまして、ごく最近にいたるまでユダヤ系とケベックワとが互いに示し合ってきたこの無知と無関心は、ぬぐい去れない偏見とともに不安と緊張を生み出すものとなつていった。⁹⁾

このように、その始まりにおいてきわめて補完的な関係にあったユダヤ系とケベックワは、時の推移のなかで互いを見失い、真の意味で認め合い対話をすることができぬままの状態に置かれていた。この両者の関係は、いわば「果たされなかった出会い」¹⁰⁾とも言い得るものであった。

このようなユダヤ系とケベックワとの関係は、文学においてもしばしば鋭く映し出されてきた。従つて次章では、モンリオールのユダヤ系作家に注目する。なかでも仏語表現によって活発な創作活動を展開してきたナウム・カタンの作品を読み直し、そこに描かれたテーマを手がかりに新しいコスモポリタニズムの可能性について再考したい。

Ⅱ ユダヤ系仏語表現作家ナウム・カタンの「横断」と「承認」

1. モンテリオールのユダヤ系作家

モンテリオールにおけるユダヤ系からは、とりわけ英語表現による世界的にも名前を知られた重要な作家が輩出することになる。

モンテリオールへ移住した初期のユダヤ系移民の一族に生まれたA.M. クライン (Klein, A.M., 1909-1969) は、イディッシュ語文化から脱皮していったユダヤ系社会を背景に、*The second scroll* においてユダヤ性そのものを問いかける壮大な物語を作り上げた。一方、次の世代出身のモーディガイ・リッチラー (Richler, Mordecai, 1931-2000) は、ユダヤ系社会の呪縛からの解放と個の確立を主たるテーマに、旺盛な筆力で数々の作品を生みだした。リッチラーの作品には、ユダヤ系の居住地やモンテリオールの街角の情景が生き生きと活写され、モンテリオールへの愛着の深さが溢れている。リッチラーはまた、ケベックにおいて言語的少数派であった英語系住民の立場から、歯に衣着せぬ論調で、連邦とケベックとの政治的関係やケベックのフランス語化政策を鋭く批判した。リッチラーの言説はまさに、疎遠になっていったユダヤ系とフランス系住民の軋轢を雄弁に表すものであった。また、モンテリオール出身で後にアメリカに移住したレナード・コーエン (Cohen, Leonard, 1934-) は、著名なポップ・ミュージックの歌手として知られているが、詩人や作家としても優れた仕事を残している。

一方ユダヤ系のなかでも、英語表現作家の傍らで、半世紀近くもモンテリオールに在住し仏語表現によって作家活動を行ってきたナウム・カタンは、異色の存在であると言えるだろう。ナウム・カタンは1928年にバグダットのユダヤ系の一族に生まれた。1947年にパリに渡り、ソルボンヌ大学で文学を学ぶ。その後1954年にカナダへと移住して、モンテリオールを中心に活発な創作活動を繰り広げていく。1975年にパリで発表した自伝的な作品『さらば、バビロンよ』で本格的に作家としてデビューする。小説にとどまらず、評論やエッセイなど複数のジャンルを手がけ、今日でもその旺盛な創作意欲は衰えてはいない。

カタンは、その経歴からユダヤ系、アラブ系、キリスト教文化の影響を受けた重層的なアイデンティティをあわせ持つ。モンテリオールでのユダヤ人の多数派をなすアシュケナジムの出身ではないが、ユダヤ系とフランス系の橋渡しの役を果たしたユダヤ系仏語協会 (Cercle juif de langue française) の代表の一人として積極的に両者の関係の構築につとめてきた。そして自ら述べているように、半世紀にわたるユダヤ系とケベックワの歴史とその変遷を、生きた証人として間近に眺め続けてきた。

実際、カタンの作品には、男女関係の機微や一般的な人間関係の苦悩とともに、しばしば民族的な共存や他者との出会い、言語と文化の越境といったテーマが巧みに織り込まれている。そして、ユダヤ系とケベックワとの関係から導き出された問題意識を下敷きにもう一度作品を読み返してみると、さらに新しい側面が浮かび上がってくるように思われる。

2. *La Traversée* 『横断』

1978年に発表された短編集『横断』¹¹⁾には、アイロニーとペーススにあふれた軽妙な筆致で、奇妙な人間模様を描きだしたいくつかの物語が収められている。「旅の終わり」と題された物語では、将来を誓い合った男女が新しい生活を始めるために、男の故郷へとやって来る。しかし、ささいなことで二人の間にはすきま風が入り込み、始まりであるはずの新天地で皮肉にも二人の関係は終わってしまう。「身代わり」では、夫と別れ、救いを求めて身を寄せた姉妹の家で主人公は運命の男とめぐり会う。しかし、ようやく見いだしたと思った安らぎはほんのつかの間の幻想にすぎず、男は別の女性のもとに去る。「夕食」では、社会的に成功した有能な弁護士が、思いを寄せ身の回りの世話をやいてくれた女性の存在の大切さに気づくことなく仕事を優先させていく。ついに女性は愛想をつかし弁護士の元を去る。男がその女性の温もりとかけがえのなさに気づいたのは、すべてが終わり一人で冷たい夕食を食べていたときだった。このように、『横断』と銘打たれたタイトルのもとに集められた物語には、いずれもさ

りげない日常の人間関係のすれ違いや皮肉な結末が描かれる。ここで喚起される「横断」が人との交流や人とのつながりを暗示しているならば、それはつつがなく終わり幸福な融合としてあるのではなく、結びつきの失敗やほころびや破綻によって表される。このようにカタンが描こうとするのは、悲観的なまでの「横断」にひそむリスクや矛盾ややるせなさである。

さらに一般的な人間関係にとどまらず、ここに取められたいくつかの作品には、カナダという国の事情を背景に民族や文化、言語の横断や越境の問題を鋭く問いかける物語が取められている。例えば「隣人」という作品では、モンリオールの市街のアパートに住んでいた主人公の隣に、ある日一人の中国人が住み始める。会えばはにかんだ様子で挨拶をするこの隣人が本当のところは何をしているのか、主人公はなかなかうかがい知ることができなかった。主人公はそうした隣人を訝しげに思いながらも、踏み込んで彼のことを知ろうとはしなかった。中国人は不定期に、時折せっぱ詰まったように出ていった。とうとう中国人の行動がつかめたのは、彼がこの国を出ていく直前のことであった。中国人はカナダに関する様々な会議やシンポジウムに出席し、フランス語で必死にメモを取っていた。中国人は隣人である主人公に誇らしげに言うのである。まだ外国語の知識が十分でなかったのに、この国にいる間はこの国のことを十分に理解することが出来なかった。しかし、中国に帰ってゆっくりフランス語で取ったメモを解読し、この国についての理解を深めるつもりなのだ、と。すなわちここでは、中国系移民のシリアスで滑稽な行動を通して、互いの無理解と無関心がカナダでの人間関係をいかに形骸化し空洞化したものにする恐れがあるかを諧謔を込めて描いている。また、「アルファベットの番人」と題された物語では、祖国の言語と文化を必死に守ろうとする男の物語が描かれる。トルコ人の君主はアラビア文字の使用を止め、ラテン語表記を採用した。アリ・スルマンはそのような君主に反発して国を出る。アラビア文字表記によるトルコ語を守るべきだと主張しながらアリは各地をわたる。しかしアラブ諸国でも欧州でも、ラテン語表記の採用はむしろ進化の象徴だと受け止められ、アリの熱意は冷ややかに受け止められる。そしてひょんなことから、カナダのエドモントンに同胞人がモスクを建てていると知り、その遠い地の果てでこそ自らの使命は果たされると信じて移住する。エドモントンで小さなレストランを営み、献身的な妻をめとり、トルコのラテン語のアルファベットで書かれた膨大な文献を、アラビア文字表記のトルコ語に書き写す。アリは、祖国の抹殺された言語と文化を守ろうと、その気の遠くなるような仕事を祖国から遠く離れた地の果てで、孤軍奮闘して成し遂げようとする。そんなある日、エドモントンにトルコの著名な文化人であるハミッドがやって来る。ハミッドはトルコの伝統的な言語と文化を擁護する論客として知られていた。アリはすっかり喜んで、とうとう自分の仕事の真価を理解し賞賛してくれる人物がやってきたとその客人を歓待する。しかし実際に現れたハミッドは、体制側にやすやすと追従するエセ学者にすぎず、アリの期待は大きく裏切られる。ハミッドはアリの翻訳の膨大なコレクションを前に賛辞の言葉を口にしながら、もう時代は変わってしまったのだと醒めた言葉を残してトルコに帰る。この物語には、移住にともないしばしば経験されるであろう、古きよき祖国への幻想と変貌していく現実の祖国とのあらいがたい乖離が描かれる。アリが企図した、越境の地で、祖国の言語と文化を擁護しようとする試みは、「横断」の途上で空しく空回りすることとなる。

最終章に近い「孤島の本屋」では人間関係の匿名性の皮肉が描かれる。寂れたある島に、ある日突然ミステリアスな男がやって来て本屋をひらく。正体が分からなくてもひどく教養のあることは見て取れるその男に、島の住人たちは次第に惹かれ心を開いていく。しかし島の誰かがひょんなことから、有名人であったその男の正体を知ったとき、男は騒ぎを避け逃げるようにその島から消え去ってしまう。本当のところ、お互いがお互いに誰であるかをきちんと認識し合って暮らすことがいかに難しいかを、あるいは互いに認識し合ったときにはしばしば遅きに過ぎることをこの物語は象徴的に示唆しているように思われる。

このように、『横断』には、人と人との邂逅にとどまらず、社会や言語、文化の越境の途上で生じた「果たされなかった出会い」を象徴するかのような物語の数々が描かれる。単に人が共存することは本当の意味での出会いではなく、無関心と無知の垣根を超え真に認識しあってこそ、初めて本当の出会い

が実現するのだということを、これらの物語は逆説的に描き出そうとしているのである。

3. *L'Anniversaire* 『記念日』——「承認」と「和解」——

『横断』の四半世紀後に書かれた長編小説『記念日』¹²⁾において、カタンは再び真の意味での出会いのテーマを問いかねながら、同時にケベックワとの関係に正面から向かい合おうとしている。物語にはカタンの分身であるかのようなシリア出身のアラブ系ユダヤ人、ルネ・シャムが主人公として登場する。ルネは幼い頃から両親に連れられて世界の各地を転々とした後にモンテリオールにたどり着く。ユダヤ人としての誇りを持ち続け、息子が医者や実業家となることを期待した両親の思いとは裏腹に、ルネは結局、ヌーベル・フランス時代のフランス系カナダを専門とする歴史家として身を立てる。

歴史家としてそれなりに成功し70才を迎えたルネは、誕生日を祝ってくれた人々にお礼の手紙をしたためる。この小説は、人生の節目を迎えたルネが、妻や娘、かつての恋人や愛人、親友、仕事仲間、ライバルであった同僚、あるいは教え子など、彼を取り巻く親しい人々へと宛てた手紙の数々から成り立っている。そしてその手紙の文面からは、孤独と挫折に満ちたルネの人生が浮かび上がってくる。冒頭の親友にあてた最初の手紙でルネはいきなりこう問いかける。「私たちはよく顔を合わせながらも、本当の意味で語り合ったことなどなかったのではないか、長い間つき合いながらも互いの本当の姿を理解してはいなかったのではないのか」¹³⁾と。すなわち、この数々の手紙において、ルネは自身の本音をさらけ出し、人生の途上で係わり合った人々と本当の意味で向かい合おうと試みる。この小説のもう一つの仕掛けとして、各々に向かって語りかけた手紙の後には、ルネが自分自身に語りかけ、独り言つかのようなもう一つの手紙が付随している。そして内面をえぐるような率直な言葉の数々によって、これまで隠されていた虚栄や欺瞞が暴かれ、心底からの喜びや悲しみ、心躍る一瞬とともに、やけるような悔恨や失望などルネの人生の様々なハイライトが照らし出される。

若い頃惹かれ合って結婚したにもかかわらず、性格の不一致から心が離れてしまった妻、夫婦の不和を間近に眺めて成長し、家庭をかえりみない父親への反発から早くから家を出奔し、父の意にそぐわないアメリカ人と結婚した娘、ルネは家庭の崩壊という現実から目を背けるように、文献の解説に没頭し研究へのめり込んでいく。そして娘を愛しながらも「溢れんばかりの愛の示し方を知らなかった不器用な父」は、祝いの席に招待され何十年ぶりに再会した娘をすぐには見分けることができず、ようやく訪れた和解のチャンスを逃してしまう。娘に宛てた手紙のなかで、父は心穏やかに自らの非を詫び、淡々と二人の和解を呼びかける。

もう私の人生は残り少ない。……今の私に与えられる最高の贈り物があるとすれば、それは君と和解できることだ。¹⁴⁾

しかしルネのもう一つの述懐からは、むしろ頑なに拒絶して去ってしまった娘への複雑な思いと、断絶した父娘関係への深い嘆きがかみ上げる。そしてそれにもかかわらず、奇跡のようにいつの日か互いに認め合える日が来ることへの願いが強い口調で語られる。

……おまえは頑ななまでに私を遠ざけ、私を受け入れようとはしなかった。私はそれを恨んでいるよ、最後の日まで恨み続けるだろう。……それでも私は待ち続けている。いつの日か奇跡が起こって、おまえの人生のなかで、父として、そしておまえの子供たちにとって祖父として私が迎え入れられることを。¹⁵⁾

長年の研究仲間でありライバルでもあったアドリアンに宛てた手紙からは、研究者として正反対のタイプであった二人が、次第に接点を失って互いの本心を隠し合い、猜疑心に満ちた表面的なつき合いに落ち込んでいったことが明らかになる。ルネは、熱っぽくもう一度失われた友情と信頼を取り戻そうと語り

かける。

……なんという誤解だろう！ なんという大きな損失だろう！ あんなに仲の良かった二人が。
……もう一度、夜通し語り合ったあの頃に戻りたい。¹⁶⁾

しかしルネの内面の述懐からは、冷徹な眼差しでルネとアドリアンとの埋めがたい距離が語られる。愚直なまでの実証肌の研究者であるルネから見れば、文献を離れ直感に頼り日和見的に学説を展開するアドリアンは傲慢でペテン師のようだった。互いに相容れない存在であることを気取りながら、欺瞞に満ちた友情を演じつづけた二人の歩みが暴かれる。ルネはしかし、互いに老境を迎えたアドリアンに向かって澄んだ境地で諭すように語りかける。

いずれ退職してしまえば、誰も君を振り返るものはいなくなるだろう。どんな研究書もいつかは忘れられてしまう。……いまさら君との友情を求めるなんて、老人ボケが始まったのかとも言いあげだね。……でも考えても見てごらん。お互い老境に達した今、何が一番大切だと思うかね。ここまで来て最も尊いことに思われるのは、互いを認め合い、これまでの道のりを感謝すること、そんな思いで満たされるはかない一瞬を嘸みしめることではないのかね。まだ、たった一人で生きるのは寂しすぎる。誰かに見守られることは必要ではないだろうか。¹⁷⁾

愛、友情、成功、挫折……、この小説では人生の普遍的なテーマが描き出されるとともに、ライトモチーフのように、互いに認め合うこと、すなわち「承認」のテーマが浮かび上がってくる。失われた絆をもう一度たぐり寄せるように、ルネは親しかった人々に語りかけ向き合おうとする。そして欺瞞と悔恨に満ちた人生に折り合おうとするのである。ここでの「記念日」とは、単に主人公ルネの誕生日を指すのではないであろう。記念日とはある人の存在を認識する日なのであり、人が人を認め合うその大切さを認識させる日なのである。

さらに、ルネは他者に語りかけ他者に向かい合おうとするなかで、はからずも最も深く自らに向かい合い自分自身を知っていくことになる。ルネは、異国での研究生活のなかでいったい何を求め続けてきたのかを問いかける。

いったい何を求め続けてきたかって？ 失われてしまった故郷をだよ。奪われた家や通り、失った街をだよ。¹⁸⁾

そして、ルネは自分自身への問いかけのなかで、いったい何に突き動かされてフランス系カナダの歴史研究に没頭してきたかを悟る。ルネを駆り立てたのは、「フランス系カナダ人の謎」、すなわち彼らの執拗なまでの生き残ることへの執着心であった。

なぜ、そんなにも彼らは生き残ることに拘り続けたのか。いったい何が彼らを救ったのであろうか。言語だろうか。宗教であろうか。……それは私の人生をかけたフランス系カナダ人の謎であった。それは、私を夢中にさせた。それはまさに私自身のことのように他人ごとではなかった。

…… 私がここにいるのは、私がかれらを認めているからなのだ。痕跡も残さずただ消え去っていくことを頑として拒む彼らは、私自身の姿でもあったのだ。¹⁹⁾

こうしてルネは、異国に生きるユダヤ人である自らの姿とフランス系カナダ人の運命とを重ね合わせる。そして、生き残りをかけたマイノリティへの共感と連帯感が強く自分を突き動かしてきたことに気づかされるのである。

事実、カタンはインタビューにおいて、ケベックワとの関係性を問いかけることがこの小説の最も重要なテーマであると述べている。ケベックワの歴史を知り内面化することは、ルネにとって失われてしまった故郷と祖国を取り戻し、新たな心の故郷と新しいアイデンティティをうち立てることであったのだ。

結語

ユダヤ系とケベックワは、その関係の歴史において互いに大きな影響を及ぼしながら幾多の困難に直面し、無関心と無知のなかに落ち込んでいった。しかし今日、両者は新たに互いを認識し合い再び向かい合おうとしていると言えるだろう。例えば、モンテリオールにおけるユダヤ人研究の興隆、とりわけユダヤ人が残したイディッシュ語による文献の掘り起こしとその解説はそのことを如実に表している。イディッシュ語によって表現された文献からは、孤独と疎外を生きたユダヤ人の姿が浮かび上がる。それはフランス系カナダ人と呼ばれマイノリティ性を生きたケベックワ自身の運命と容易に重なり合う。カタンの小説の主人公のルネが、フランス系カナダ人の姿に自分自身を認めたように、両者は互いのマイノリティ性に共振し合い、そのことによって互いにより深く向き合うことが可能となるのである。

象徴と比喩に富んだ小説世界とは対照的に、カタンはそのエッセイにおいて、真の意味での他者との出会いやコスモポリタンな共存の可能性について、率直で真摯な考察をめぐらせている。

モンテリオールという複数性に満ちた都市において求められることは、多様性に富んだ文化の動きのなかで、匿名性に陥らぬよう各々が互いに認識しあい、手を取り合って、絶えず変容しつつある新しい文化の創造に貢献していくことである。²⁰⁾

モンテリオールにおいて、ユダヤ系とケベックワは、今日、再びお互いを認識し合い「果たされなかった出会い」を克服しようとしているように思われる。カタンが示唆するように、マイノリティ性への共振をバネに手を取り合って新しい文化の創造をめざすことこそ、真にコスモポリタンな関係をうち建てる一つの可能性であると言えるかもしれない。

注

- 1) ケベックワという名称は、ケベックナショナリズムの流れのなかで、ケベックにおけるマジョリティであることを示そうと、フランス系カナダ人という名称にかわって1960年代以降使用されるようになった。最近の動向では、フランス系に限らず移民も含めたケベックの住民すべてを指す場合もあるが、ここでは、あくまで土着のフランス系住民を指す。
- 2) ユダヤ系について考察するが、この小論においては、あえて「ユダヤ性」の問題には立ち入らないこととする。ユダヤ教という求心力をもちながら、何をもってユダヤ人とするかはきわめて難しい問題であり、今日まで議論が尽きない。この小論では、自らユダヤ人として認識しコミュニティを形作っている人々の存在を前提としている。
- 3) Gérard Bouchard, 〈Les rapports avec la communauté juive: un test pour la nation québécoise〉, *Juifs et canadiens français dans la société québécoise*, Septentrion, 2000
- 4) サン・ローラン通りについては、2002年4月から10月にかけて、モンテリオールの歴史博物館で、数々の文献や映像資料をたどりながらこの通りの歴史的な意味を問う大がかりな展示会が行われた。ここではその際の資料を参考にしている。
- 5) Monique LaRue, 〈la Main〉, *Vice Versa*, 1993 printemps
モンテリオールにおけるトランスカルチュラルな文化的状況を流通させようと創刊された雑誌である *Vice Versa* は、1993年春号でサン・ローラン通りについての特集を組んでいる。
- 6) モンテリオールのユダヤ系のユニークな分布状況に関しては、すでに研究が進んでいる。後に、1960年代以降有色系移民に広く門戸が開かれるようになると、モロッコやアルジェリアなどの北アフリカを中心に、アラブ系で

フランス語をはなすセファルデジムというグループのユダヤ系が数多く入り込んでくる。モンリオールは、アシケナジムとセファルデジムが共存する北アメリカの街として注目されている。しかしこの論考では、こうしたユダヤコミュニティそのものを問題にするのではなく、ユダヤ系とケベックワとの関わりを中心に考察を行う。

- 7) *Saint-Laurent, La Main de Montréal*, Pierre Anctil, Septentrion, 2002, p.43
- 8) ケベック史上、いくつかの忘れ難いユダヤ人排斥事件が起こっている。大戦間におけるケベックの大学でのユダヤ人受け入れ拒否の歴史的経緯については、P.Anctilの著書(1988)に詳述されている。例えば、1934年にモンリオール大学の付属病院で、インターンたちが、ユダヤ系の医学生を受け入れを拒否した事件が起き訴訟にまで発展した。
- 9) *Juifs et réalités juives au Québec*, Pierre Anctil et Gary Caldwell, IQRC, 1984 Montréal
- 10) この言葉は、Pierre Anctil, *Le Rendez-vous manqué, Les Juifs de Montréal face au Québec de l'entre-deux-guerres*, Québec, IQRC, 1988からとったものである。
- 11) *La Traversée*, Naim Kattan, l'abre HMM, Montréal, 1974
- 12) *L'Anniversaire*, Naim Kattan, Editions Québec Amérique, Montréal, 2000
- 13) *Ibid.*, p.7.
- 14) *Ibid.*, p.32.
- 15) *Ibid.*, p.37.
- 16) *Ibid.*, p.41.
- 17) *Ibid.*, p.51.
- 18) *Ibid.*, p.142.
- 19) *Ibid.*, p.143.
- 20) *Juifs et Canadiens Français*, Naim Kattan, *Etudes Françaises* No 37.3, 2001, p.109.

【付 記】

この論考は、2005年度カナダ政府研究出版助成 (FRP) の成果報告の一部である。記して感謝の意を表したい。

(2005年6月3日受付)
(2005年11月25日掲載決定)